

りたつものかととふ、生得は色があをけれど、かまにていりて、あかふなるといふをがてんしる
けり、ある侍の馬にのりたる先一二間半柄の朱鑊、二十本ばかりもちたる中間どものはしるを
みてうつてさても世はひろし、奇特なる事やと感ずる、なにをそなたはかんずるやとひたれ
ば、其事よ、今の鑊のえのいろは、火をたひてむいたものぢやが、あれほどながひなべが、よふあつ
た事やと。

〔倭名類聚抄三藏府〕三焦 中黄子云、三焦美乃和太、孤立為中瀆之府、○府下一本有野王案上

〔箋注倭名類聚抄二臟腑〕山田本注首有「焦字」下總本有「下字」醫心方同訓、○中 昌平本夾注上焦中焦

下焦也七字、曲直瀨本、下總本、上中下三字作上焦中焦下焦六字、

〔類聚名義抄二肉〕焦音焦、液焦、唾焦、三焦ミノヲタ

〔伊呂波字類抄見人體〕三焦六府也

〔增補下學集上二〕三焦孤立為中

〔黃帝八十一難經疏證下〕三十一難曰、三焦者、何稟何生、何始何終、其治常在何許、可曉以不然、三焦者水穀之道路、氣之所終始也、上焦者在心下下膈、在胃上口、主內而不出、其治在臆中、玉堂下一寸六分、直兩乳間陷者、是中焦者在胃中脘、不上不下、主腐熟水穀、其治在臍傍、下焦者、當膀胱上口、主分別清濁、主出而不內、以傳導也、其治在齊下一寸、故名曰三焦、其府在氣街、一本曰衝、

〔醫心方六〕治三焦病方第廿

病源論云、三焦盛為有餘、則脹氣滿於皮膚、內輕々然而不牽、或小便澀、或大便難、是為三焦之實也、則宜寫之、三焦氣不足、則寒、氣客之病遺尿、或泄利、或胃滿、或食不消、是三焦之氣虛也、宜補之、

〔和漢三才圖會十一經絡〕三焦和名美乃和、手少陽三焦和名美乃和、

三焦者、決瀆三官水道出焉、與手厥陰為表裏、